



伊能忠敬篇 1

伊能忠敬と日本地図

今、私たちが普通に使っている地図。最初に科学的な測量によって地図がつくられたのは、いつ頃かご存じですか。

江戸時代、寛政12年（1800）から文化13年（1816）まで、17年をかけて全国を測量し、『大日本沿海輿地全図（だいにほんえんかいよちぜんず）』という地図の完成によって、日本の正確な姿が明らかとなりました。これが、日本最初の科学的な地図です。

この地形測量を行ったのが、伊能忠敬。彼のプロフィールをご紹介します。忠敬は、延享2年（1745）、現在の千葉県九十九里町で生まれました。17歳で伊能家の当主となり、佐原（現在の千葉県香取市）で実業家として活躍しました。その後、家督を譲り、隠居し、50歳で江戸に出ました。江戸では、天文・暦学を学び、自宅に観測所を作って太陽や恒星の高度などを熱心に観測しました。師匠が地球の大きさを知りたがっていることがわかり、「地球の大きさは計算できる」そう思いつくと、すぐ実行にとりかかりました。

「日本列島測量の旅」のはじまりです。

寛政年の蝦夷地（現在の北海道）の測量にはじまり、10回にわたって、全国を測量しました。忠敬は第9次の伊豆七島測量を除いて全測量に従事しました。その測量距離は約4万キロ、忠敬自身の旅行距離は3万5千キロに達しました。

文政元年（1818）、忠敬は73歳で亡くなりましたが、地図の編集作業は続けられ、文政4年（1821）、『大日本沿海輿地全図』が完成しました。この地図は、極めて精度の高いもので、ヨーロッパにおいて高く評価され、近代日本の基本的な地図として、活用されました。

文化5年（1808）の第6次の測量では、忠敬ら一行は宇陀を訪れています。さて、どの辺りを訪れたのでしょうか。

